

Title	人格化される熊(2)
Author(s)	永井, 理恵子
Citation	聖学院大学論叢,20(2) : 207-227
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=43
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

人格化される熊(2)

— 物語, 自然信仰, 口承昔話に見られる熊 —

永 井 理恵子

The Personification of the Bear (2):

— Bear in Stories, Deism, Old Tales

Rieko NAGAI

There are so many different types of characters with such varying designs in Japan today. Most of these characters are taken from animals but are often inspired by human beings and plants. More than that, there are even imaginary characters. Not only do we see them around children as toys but also as decoration in homes.

Why are these characters so attractive to people? Characters allow people to have hopes and dreams for their lives, emotional balance, and a deep feeling of happiness. In this paper, the writer specifically picked the stuffed bear to analyze why it (a little bear) is so loved by people. At the same time, the writer looks at fairy tales and picture books in which bears are often present. The writer also studies what those fairy tale writers think of bears and why they write about them.

Key words: Deism, Old Tale, Bear, Religion, Story

序

1. 考察の目的と課題

本研究ノートは、『聖学院大学論叢』第20巻第1号に掲載された同題目(1)に続くものであるので、考察の目的と課題は省略する。

2. 課題に接近する視点

本ノートの(1)では、課題に接近する視点として、キャラクターの「くま」の原型である動物の熊の生態の簡単な紹介と母熊の持つ母性、および、ぬいぐるみの「くま」であるテディベアの魅力の

秘密とそれが人間に及ぼす心理的役割について、2章にわたって述べた。今回の(2)では、世界各地において熊と人間が築いてきた関係の幾つかの実際と、文学における「くま」の存在に焦点を当てて論じる。

熊は古来、恐怖の対象でありながらも、一部の民族においては特別な存在として扱われてきたのは良く知られるところである。ロシアでは熊はもともと人間であったという口承伝承があり、熊の愛称を「ミハイル」と人名で呼ぶことや、アイヌ民族が熊を送る儀式として「イオマンテ」という祭りをおこなってきたことは一般に知られるところである。また、2007年8月にNHKで放映された番組『世界里山紀行－フィンランド 森・妖精との対話』においても、ヒグマが「タピオ＝森の王」と崇められ、あらゆる動物の狩猟をおこなうフィンランドの人々の間でも熊だけが特別な儀式的手順を踏んでおこなわれていると報告されていた。人格化される熊、さらには「人」を超えて「神」あるいは「神の使い」として認識される熊を改めて顧みる時、人間と熊の関係性は非常に興味深いものがある。生活の中に熊が常に存在していた北国の民族が、熊をどのように認識してきたのかという点について注目することも、キャラクターとしての「くま」を考察するに当たり、参考とする価値がある。また、人間が文学や絵本の中でクマをどのように描いてきたかを観ることも、「くま」のキャラクターの持つ魅力や、人間の感性にとってのクマのキャラクターの立場を知るのに役立つであろう。

なお、(1)同様、本稿においては基本的に、動物としてのクマには「熊」という漢字を用い、キャラクター化されたクマについては「くま」と平仮名を用いて表記することとするが、章によって若干の用法の違いがあることを最初に、ことわっておく。

第1章 歴史に見る熊と人間との関わり

熊は、ある地域においては古くより、神として崇められたり、或いは民話や口承伝承の中に登場してきことは前述のとおりである。しかし、その様相は地域によって様々であり、一概には語りつくせない。人々の日常生活の中で熊が身近な存在であったか否かによって、熊の認識は異なるからである。

本稿では、ロシア、アイヌ、フィンランド、日本本土を取り上げ、それらの地域における熊と人間の関係について簡単に概観してみる。なお、本ノートは人格化される熊の研究をおこなうものであるが、本章においては人格化のみならず、神格化されている熊も登場する。熊が人間を超えた存在として認知されている事実を検討し、その背景にある熊理解について考究を深めるためであることを、ここで断っておく。

1. ロシア

ロシアにおける熊は、人々にとって古くより身近な存在であったようだ。神として崇められることもある一方、もっと親しみを込めた感覚で捉えられてもいたようである。参考資料によれば、熊には古くより「ミハイル」(愛称化して「ミーシャ」という名前が充てられてきたというし、「熊」を意味するロシア語には「蜂蜜喰い」という意味があるという(相澤HPより)。また、シベリア全域で一番崇拝されているのは熊(北極では白熊)であり、「タイガのあるじ」と呼ばれる⁽¹⁾。シベリアの猟師は熊のことを「爺さん」ないしは「黒い爺さん」と呼ぶ。その理由は、「熊はシベリアの森林ではもっとも強い動物」であり、「力と知と巧みさのシンボル」であり、「熊を仕留めれば礼をつくして扱う」し「幾つもの種族のトーテム(筆者注:神)」でもあるからだというのである⁽²⁾。『ロシアの民話Ⅰ』(1977)及び『ロシアの民話Ⅱ』(1979)にも熊を題材とした複数の民話が掲載されている。特にⅡ所収の「くまとしまりす」は、「サハリンのニブフからサヤン産地のトラファルまでの広がりを持って(中略)各地でお気に入りの話である」⁽³⁾という。民話に登場する熊には、様々なキャラクターづけがなされており、その性格描写も一様ではないが、大きな体格に似合わぬ繊細な心をもった熊が描かれている場合が多く興味深い。恐らくは狩猟の場面で猟師が見かけた熊の行動形態に、そのような繊細性を見出したためではないかと推察する。

ロシア民族における熊は、人間が狩猟生活者であった時代から、特に重要な存在であった。プロップは、その著書『ロシア民話』において、動物昔話の登場動物について次のような見解を述べている。すなわち、動物昔話の登場動物は、特にロシアにおいては野生の動物が主であった⁽⁴⁾。家畜が登場した後でも話の主役は野生動物であって、家畜は脇役として登場するに過ぎなかった。つまり、ロシアの動物昔話の起源は「森の動物たちが原始的な生業形態、すなわち狩猟の対象であり、思索と芸術活動の対象であった、人類文化の発展段階」に遡るといふ⁽⁵⁾。続けてプロップは、ロシアの動物昔話においては特に動物が神格化されて描写されたわけではないけれども、「登場人物が人間ではなく、力や、人間の及ばない能力に恵まれている動物であるが、それが人間として活躍する場合、そのことは人間を動物と区別しないトーテミズムとの関連を証明」しているといふ⁽⁶⁾。つまり、古く狩猟生活時代から語り継がれてきたロシアの動物昔話は神話ではないが、そこに登場する動物のありかたは明らかに神性を帯びたものであるとプロップは解釈しているのである。

一方、大楽千翔は「ロシアにおける熊と人との関わりについて」という論文において、「森の主人たる熊」「唯一の大型肉食獣」の熊を神聖な神として崇める信仰が、ロシア民族には存在していたと述べる(相澤HPより)。また、器用な手や直立できる脚などから、「熊はもともと人間であった」という伝承もあったという。つまり人間であったのに天罰を受けて熊にされたという伝承も、ベラルーシやウクライナに残っているというのである。

近代に目を移せば、ロシアの曲芸団などが連れてくる熊の芸当は見事であるし、モスクワ・オリンピックのキャラクターには熊が用いられたことも周知のことである。

ロシアにおける熊の神話性については、学者により様々な見解があるので、本稿においては深い考察は控えることにするが、いずれにしてもそもそも狩猟民族であったロシアの人々、森林と共に生活してきた人々にとって、森に棲む熊は種々の意味で身近な存在であったに違いない。それを神格化したり、あるいは人間に見立てたり、様々な芸当を仕込んだり、キャラクター化したりと、ロシアの人々は熊との深い関係性を保ちつつ、時代を歩んできたのである。その深い関係性の奥に潜むものは、その人間的な動態や風貌、高い知能や豊かな感性、大柄な成獣の体型などの熊の特徴と、人間との間の近い距離があったのである。

2. アイヌ

北海道に住むアイヌ民族の人々がおこなう「熊送り」と言われる祭祀がある。通称「イオマンテ」あるいは「イオマンテ」として良く知られている(ここでは「イオマンテ」を用いる)。「イオマンテ」とは「イ」(それ) + 「オマンテ」(行かせる) = 「それを行かせる」という意味で、これは飼育した子熊とシマフクロウの2種の動物の霊を送る祭りにのみ限定して用いられる。アイヌの人々にとって、熊(ヌプリ・コル・カムイ: 山を領有する神)とシマフクロウ(コタン・コル・カムイ: 村を領有する神)の2種の動物が大変に神格の高い神であると考えられてきた。アイヌの昔話における熊の説明は、「いちばん高い山を守るために、天の国から降ろされた位の高い熊の神」⁽⁷⁾というように表現されている。神格の高い動物に対する送りの儀式の中でも、広くおこなわれて知られる「イオマンテ」といえば、熊の中でも特に人間に飼育された子熊の送りの祭りを指すものとなっている。アイヌの人々が特別な祭祀をもって送るのは、熊、そのなかでも捕獲された後に1~2年ほど飼育された子熊に限定されているのである。ここでは、イオマンテの思想構造と、なぜ子熊のみがイオマンテの対象とされるようになったのかを、先行研究からまとめてみる。

イオマンテは、捕獲されて1~2年ほど飼育された子熊を殺し、特別な段取りの儀式をおこない、料理を準備する、村を挙げての一大行事である。祭主を決め、近隣縁者を招待し、花矢を作る。カビリングと呼ばれるゴザのようなものに団子や鮭の燻製を入れて用意する。飼育してきた子熊を殺し、皮と頭部を剥ぎ、特別な畳み方に畳む。畳まれた熊の皮と頭部は既に熊ではなく、神(カムイ)となっていて、牡と牝とで異なる供え物をする。肉や内臓は血に至るまで、参加者が食してしまう。

この行事は、長い間、アイヌの村(コタン)でおこなわれてきた伝統行事であったが、近代日本では野蛮であるとか動物愛護の精神に反するなどの理由で弾圧を受けたと共に、この儀式の正しい方法を伝授できる古老の減少なども相俟って、今日では、文化保存のための行事のようになってしまった。しかし、なぜ子熊を送る時のみに「イオマンテ」が執りおこなわれたのだろうか。イオマンテは、熊は熊でも、捕獲して飼育した子熊の送りにのみおこわれるもので、成人した熊に対してはホブニレという別の送りがある。しかしホブニレはイオマンテとは比較にならないほどの小規模なものであり、子熊に対する送りだけが別格化していた。

人格化される熊(2)

中路正恒「イオマンテという送りの思想」と松居友「イヨマンテ、熊送りの思い出」(いずれも所収文献については参考文献一覧参照)をもとに、アイヌのイオマンテの思想について簡略にまとめる。熊は、牝熊は子育てをおこなわず、牝熊がおこなうのは研究ノート(1)で見たところであるが、冬季、穴にこもる成人した熊を狩る際、その傍に1~2頭の子熊がいる場合がある。その際、子熊は殺さず連れ帰り、コタンの中で比較的裕福な家族が引き取ったり或いは売買されて、1~2年の間、母乳その他の良質な食物を与えて育てられる。熊は大食なので、裕福な家庭でないと子熊を引き取ることは困難である。その後、先に述べたようなイオマンテの儀式を執りおこなう。すなわち、せっかく育てた子熊を殺してしまうわけである。その祭祀を支える思想は如何なるものか。

研究者によって、その解釈には諸説があり、一概に総括して述べるのは困難であるが、おおよそのところは次のようなものである。そもそもヒグマは、アイヌの人々にとっては単なる猛獣ではなく、神(カムイ)であり、特にヒグマは神々の中でも特別な格を有する神である。彼らは、動物は種ごとの神の国に住んでいて、神の国にいる時は皆、人間と同じ姿をしていると考える。それが、人間の世界に下りてくるにあたり、毛皮を着て、それぞれの動物の姿になってくるという。つまり、アイヌの人々にとって熊は神であり、その神はもともと人間と同じ姿かたちをしている。それが人間界にやってくるにあたり、熊の毛皮を着て熊の格好となって現れると考えている。

人間によって殺された母熊は、殺された時に既に神となって神の国に帰ってしまった。後に残された子熊は、まだ人間の世界にいて、神になっていない。イオマンテによって皮と頭部を脱ぐと、その子熊も神となる。神の国は東方にあると考えられていたので、イオマンテの際にアイヌの人々は花矢を東の方向に放ち、神となった子熊に母熊の行った方向を教えるという。子熊が先に神となった母熊のいる神の国に旅立つに当たっては、先に述べたカビリンギー杯のご馳走を持っていくと考える。これは「おみやげ」であるという。

この行事をとおしてアイヌの人々は、「神によって生かされていることを実感し、神に向かって感謝の祈りを捧げる。これは感謝の祭りの完成された姿でありましょう」⁽⁸⁾と松居は述べる。無論、こういった点もイオマンテの重要な要素であるが、これだけでは筆者は、なぜ熊だけが感謝の儀式を執りおこなってもらえるのかという点や、殺すことに対する人間の主観的な自己弁護としてイオマンテをおこなうのではないかと言った点がわだかまり、今ひとつ腑に落ちない感を受ける。この筆者のわだかまりを解く説を、前掲の中路が提示している。すなわち中路はイオマンテを、人間の犠牲となった神=熊への感謝や、本人は望んでいない犠牲となって受苦をした熊を手厚く葬るといった解釈に留めず、子熊と母熊の關係に触れて述べるのである。

中路は、イオマンテにおいて死にゆく子熊には喜びがあり、それは「母性的な原理」⁽⁹⁾にもとづくものであるという。アイヌでは、冬眠中の牝熊を穴狩りで狩り、殺す場合、そこに一緒にいる子熊を絶対に殺さない。この子熊をどうするかは地域によって異なるが、母熊を殺された子熊は、どのみち生きていくことはできないので、その場で一緒に殺してしまう民族もある。中路は、飛驒の

獵師の話を用いし、獵師は母熊を撃った時に、子熊に対して非常に哀れな感情を持つということを紹介している。続いて「初年の仔は数百グラムもないような小さな存在である（中略）そのような小さな生きものに対する親密な愛情のせいであろう。」^[10]という中路の解説が加えられ、子熊が非常に哀れみの感情をそそるような可愛らしい存在であることを暗喩している。続いて中路は、椋鳩十が述べていると前置きしたうえで、「熊の場合、母の仔に対する愛情の深さは、きわめて深い（中略）仔を生んだばかりの母熊が冬眠のさなかに殺されるとき、その母熊がわが仔に対して懐いているであろう愛情は並大抵のものではなく、わが仔の幸福な生を願う思いにはきわめて切実なものがあるであろう。母熊を狩り獲る獵師は、その母熊の思いをきわめて切実に受けとるのではないであろうか。そしてそのとき、母熊とアイヌとの間には、ひとつの決して違えてはならない約束が結ばれるのではないであろうか。それは、母熊の命を奪う代わりにその子熊たちを幸せに育てるという約束であり、人々は、暗黙のうちにせよ、母熊との間にそのような約束を結んでいるのではないだろうか。」^[11]と述べる。中路は、イオマンテの中には、「母性的な配慮」^[12]が見えるというのである。1～2年という時間は、「仔熊が人々の間での生をある程度充分に楽しみ、そしてまた神の国にひとりで行くための強健さや思慮の力が身につくまで」^[13]の期間であるという。

アイヌ文化、イオマンテの解釈は奥深く容易ではないことを承知で述べるが、ここで中路が説明するところのアイヌにおけるイオマンテの意味を読むと、そこには母熊と子熊の間に成立している濃厚な母子関係が重要な鍵であると判断できる。無論、熊が真にそのように感じているかどうかは理解する由もないのであるが、母熊の子育ての様子を見る人間は概ね、人間の母子関係にも似た強い絆による結びつきと、深い愛情の交換を、そこに見るのである。すなわち、母熊の姿や態度と、それに対する子熊の姿や態度の在り方が、人間に、共感と憐憫の感情を自ずと湧き上がらせる要素を秘めていると理解できるのである。それと共に、研究ノート(1)第1章の3で見たような、人間の乳幼児を連想させる子熊の姿かたちや動作、生きるおもちゃのように見える小さく丸っこくフワフワした子熊の姿そのものも、狩りをする人間に、哀れと愛おしさの情を呼び起こすことも納得できるところである。

イオマンテの祭祀は、神の国をいかなるものとするか、あらゆる生命は誕生日や死後、どのような世界にいるのかというアイヌの人々の信仰を表すものであり、宗教的課題が色濃く滲む儀式であるに相違ない。しかし、そのような行事を生み出す背景として、熊のもつ生態が大きな要因を占めていることは、どうやら一理あるように思われる。研究ノート(1)の第1章で紹介したような生態学的記録やデータから抽出された熊の特性が、イオマンテの背後に潜んでいることは疑う余地もない。そして、熊神をそのようなものとしてイメージするアイヌ的な発想の背景には、母熊と子熊の間に見られる人間を彷彿とさせる母子愛の交換や、子育ての様子が横たわっている。熊が人格化される要因が、このアイヌ文化にも隠されているのである。

3. フィンランド

ロシア、アイヌと同様に、寒い北の大地に暮らすフィンランドの人々は、森には目に見えない沢山の「聖霊」が住んでいると考えている。フィンランドの著名作家トーベ・ヤンソンが描くムーミン・トロール一族の物語も、架空の妖精を登場人物とするものである。今夏NHKで放映された前述の番組『世界里山紀行 フィンランド 森・妖精との対話』の中で、熊が「森の生きものと精霊たちの頂点を占める」(NHKオンラインHPより)のものであり、熊は「タピオ=森の王」とまで称されていると紹介されていた。この番組を契機に、筆者はフィンランドにおける熊に関する文献を検索したが、適当なものを発見するに至らなかったため、今回は、当該番組において紹介された熊猟および熊と人間との関係について少し紹介するに留める。

古来より、フィンランドの人々にとって狩猟は、人と自然との関わりを確認するための行事であり、単なる生活の手段としてのものではなかった。とりわけ熊は、肉という贈り物をもって天から遣わされた使者であり、熊の狩猟によって天の力を分けてもらうという祈りが込められていた。秋から冬にかけておこなわれる「クマ猟」には、「森の王」とのコミュニケーションを図る儀式としての色合いが強く残っているそうである。熊を狩猟する人は、前夜より飲食を絶って一人で森の小屋に籠もり心身を清める。狩猟した熊は森で皮を剥ぎ肉と別にし、頭部はそのまま、これら全てを持ち帰る。熊が狩猟され村に持ち帰られると、「熊送り」あるいは「熊祭り」と呼ばれる宗教的儀式が催され、熊の頭部は儀式の間は上座に据えられ、その後はしばらく祭壇に祀られる。皮と頭部以外の身体は皆で分けて食べる。その後、頭部は骨だけにして綺麗に洗い、頭蓋は松の木の枝に掛けられ、熊の霊は天国へと送られるのだそうである。

番組の中で、「熊歌」という伝承歌が紹介されたが、その要旨を簡略にまとめると以下のような内容であった。

「(熊の) 鼻を食べる (それにより) お前のような鋭い嗅覚を得たい
耳を食べる 鋭い聴覚を得たい
目を食べる 深遠な視覚を得たい
舌を食べる 言葉の力を得たい」

この伝承歌は、狩猟した熊のあらゆる部分を人間が食用にしていたことと、熊を食べる行為の背景には熊を単なる栄養摂取の対象としてとらえるのではなく、熊の中に神性を見た人間が、その能力を享受したいと認識していたことが隠喩されていることが示されている。その思想的背景や祭儀の実際的方法などが、2で見たアイヌのイヨマンテに非常に類似している点が興味深い。

4. 日 本

最後に、日本における熊の位置について見る。ここでは中村禎里『日本動物民俗誌』により、まとめる。

日本の神話における熊の印象は、極めて薄いそうである。もっとも、熊を祭る行事が全く存在しなかったわけではなく、狩猟した熊の霊を鎮めるための祭儀は全国的におこなわれていたという。その方法は同書に幾つか記載されているが¹⁴⁾、それらの中には2で見たアイヌのイオマンテにおける方法と類似したものも見られる。とはいえ、それでも熊は神使の対象となりえなかったそうであるが、その理由として中村は、「クマの獯猛・強力は神使として有利な条件とはいいがたい」¹⁵⁾と述べる。熊は神使にはなり得ず、中古の貴族の間などでは魔物に近いものとしてみなされたというのである¹⁶⁾。

それにしても、熊が日本の説話などで殆ど活躍しない理由について中村は、熊の生活圏は山奥にあり、容易に人里には出没せず、人との交渉が稀であったからだという。特に日本人の多くが平地で水利のある場所に住み水田耕作をいとなむようになってから人と熊の接触は一層すくなくなり、都会人の世間話や農民の昔話における熊も不在になったと分析している¹⁷⁾。

しかし、山民や猟師の間での熊観は、それとまた異なると中村は考える。すなわち諏訪・土佐などの地域では、熊を神の姿と見る信仰が存在していたという説もある¹⁸⁾が、熊を信仰する山民や狩猟民は全国にいたのではないかと中村も考えているのである。最後に中村は、日本では都会人・農民には受け入れられなかった熊の神格化であったが、熊との接触が続いた山民や狩猟民の間には熊に対する「畏怖の念が残存し、それがクマの人格化の傾向、そしてクマの霊へのおそれの感情としてあらわれ続けているのであろう」¹⁹⁾と総括している。

全体を通して見ると、中村によれば、日本における熊の人格化や神格化は、ごく一部の山民や狩猟民の間のみ見られるものであった。水耕社会へと早期に移行した日本にあって、熊は、人間の身近に生きる動物ではなくなった。そのため、日本における熊は、山奥に棲む「獯猛で強力」²⁰⁾な動物、魔物的なものとして認識されるようになった。野生の熊は、日本本土に住む日本人にとっては、身近な存在ではなかった。これが、日本本土における熊の神格化・人格化を抑制してきた大きな要因であろうと考えられる。

熊が人格化・神格化されるためには、矢張りそれが人々の生活にとって身近であるということが重要な条件であるようだ。とすると、現代日本で「くま」のキャラクターが多く見られるようになったのは、古来伝統的な日本文化に根付くものではないということになる。本研究ノート(1)第2章や、今回の(2)第2章では、日本において「くま」がキャラクターとして広く受け入れられたり、創作されたりするのは第二次世界大戦後であることが示される。その要因の一つとして本章で見たように、日本における熊の認識が必ずしも芳しいものではなく、むしろあまり好ましくないものとして広く一般に認識されてきたことは看過できない点であろう。

第2章 ストーリーと挿画に描かれるキャラクターとしての「くま」の事例

本章では、物語に描かれる「くま」と、挿画に描かれる「くま」の特徴を、幾つかの具体的事例を通して検討していく。1では、外国の文学に描かれる「くま」を検討し、2では日本の児童書に描かれる「くま」を検討する。なお、本稿はあくまでキャラクターとして描かれる「くま」の特徴を分析することを目的とするものであり、作品研究を目指すものではないため、それぞれの分析は極く簡略なものになることをご承知いただきたい。加えて、本稿においては、外国文学を分析するにあたり、それらの原著を用いるのではなく、日本の子どもが日常的に接する和訳本を用いることに留める。

海外では、「くま」をモチーフとした文学が多く見られる。すなわち後に検討する『くまのパディントン』や『くまのプーさん』は、我が国で出版される際には児童書の領域に入っているが、それらは必ずしも児童文学の枠内に留まるものではない。また、旧ソビエト連邦圏においては、民話の中に「くま」が登場するものも多い。

一方、日本では、「くま」をモチーフにして著されたものの殆どが児童書の領域に含まれている。もっとも、日本の民話における「くま」を検討すれば、また何らかの事例が発見できる可能性もあるが、今回の考察では網羅しきれなかった。今後の追跡が必要である。

1. 外国文学に描かれる「くま」

1) 英国における児童文学

①『くまのパディントン』（「パディントン」シリーズ）

「くまのパディントン（Paddington Bear）」シリーズは、イギリスの作家マイケル・ボンドによって1958年に創造された児童文学である。この年にボンドの妻が買って来たテディベア（製造会社や品番については筆者の調査が未完了）を元に、この物語は誕生した。すなわち、パディントンの元は一体の「くま」のぬいぐるみである。挿画はベギー・フォートナムによって描かれた個性的なもので、この児童文学にはこの挿画は欠かせない存在として知られる。シリーズ化されて続編が発表され、現在の日本では、和訳本が8巻まで刊行されている。

パディントンは本の中を出て、キャラクターとしても人気を誇るものとなった。絵柄を付けた日用品やぬいぐるみなどにもなり、シュタイフ社によるぬいぐるみ化もおこなわれている。キャラクター化されるに当たっては、挿画の中で何度も描かれるところの、ダッフルコートにつば広の帽子を着用したスタイルが用いられている。

パディントンは、ロンドンのパディントン駅の遺失物取扱所に置かれていた熊を、ブラウン夫妻が発見し、家庭に連れ帰り、家族として一緒に暮らし始めるという設定で登場する。本文の描写に

よれば、熊は「きたない茶色」で、「何かちいちゃな、ふわふわしたもの」で、「とても珍しい種類のクマのよう」であり、「広いつばのついた、何とも奇妙な帽子」をかぶり、「広いつばの下から、二つの大きなまんまるい目が、じっと奥さんを見返して」いた²¹⁾。古いスーツケースを持参しており、熊の首には世話の依頼をする短い手紙が取り付けられていた。熊はペルーから来たと言っているにも関わらず、英語を使って話をする。人間のように帽子を被り言葉をしゃべる熊に、当初ブラウン氏は非常に驚くのであるが、ストーリーは「話をする熊」という有り得ない事実に関執することなく進行していく。名前はペルー語のものしかなかったため、パディントン駅での出会いにちなんでブラウン夫妻がパディントンと命名した。現在の日本では、この文学とキャラクターが余りに有名になっているため、パディントンという単語はロンドンにある駅の名前としてよりも、熊のキャラクターの名前としてのほうが一般に良く知られるまでに至っている。

全編を通してパディントンは、人間と全く同様な描写がおこわれている。パディントンは街にも出かけるのだが、街で出会う人々も、少し驚く者もいれば全く驚かない者もいて、その魅力的な人柄と可愛らしい風貌により、家族のみならず多くの人々から愛されている。物語は、日常の身近な出来事にパディントンが参加することにより、楽しいことが起きたり、ちょっとした事件が起きたりする。どの話においても、最終的にはパディントンの持っている、おっとりとした優しい性格が、周囲に様々な良い雰囲気や及ぼし、人間社会の空気を和らげている様子が描かれる。この物語では、人間社会のありきたりの出来事の中に潜んでいる不可解なことや理不尽なことが、パディントンという遠い異国からやってきた、人間社会のことを知らない他種の動物の目によって、あらためてその意味を問いなおすことが試みられている。いわば人間社会を見るエイリアンのような存在としてパディントンは登場するのであるが、冒頭の引用箇所にもあったようにパディントンは小さくふわふわしていて、可愛らしいキャラクター設定がなされており、侵入者的な悪印象を一切、与えないのである。

この文学においては、パディントンからは熊的な特徴は殆ど読み取ることができない。挿画のパディントンも全く人間と同様に歩き、服を着て生活している。あえて言えば手先が人間ほど器用ではないので、手づかみで食事する場面はあるものの、暮らしぶりは全く人間と同様である。そして、パディントン以外の登場人物は全て人間である。そこから我々は、この文学におけるパディントンの役割と立場についてのヒントを得ることが出来る。

この文学において作者は、パディントンを、当時の社会生活を時にユーモラスに、時にややシビアに描くための新しい感覚の所有者として用いているように思われる。そのためのキャラクターとして、おそらく子熊の持つ可愛らしさを生かし、パディントンを創作したと推察される。その試みにキャラクター化された「くま」は設定に見事に適合し、素晴らしい挿画と共に多くの支持者を得る文学として成立しているのである。

②『くまのプーさん』（「プーさん」シリーズ）

現在の日本の子どもたちにとって、もっとも身近な「くま」のキャラクターと言えば、「くまのプーさん」が挙げられるかも知れない。ディズニーのアニメーションで知られる、あの黄色く丸っこい「くま」である。我が国では、ディズニーの「プーさん」は全てのディズニーキャラクターを超え、主役のミッキーマウスをも凌ぎ第一位の人気を誇るキャラクターとなり、テーマパークでは子どもだけでなく大人も「プーさん」を追い求める。同時に、その原作が、イギリスの詩人・劇作家であったA.A. ミルンの著した『くまのプーさん』シリーズであることも、知っている人が多い。今回の論考では、ディズニーアニメーションの中で描かれる「くまのプーさん」はひとまずその外に置き、原作の『くまのプーさん』シリーズにおける「くま」について論述する。

「プーさん」シリーズは、2冊、各10話から成る。2冊の題名は『くまのプーさん』（Winnie-the-Pooh, 1926）と『プー横丁に建った家』（The House at Pooh Corner, 1928）である。作者は風刺詩、随筆、劇作家であったA.A. ミルン（A.A. Milne, 1882～1956）で、挿絵はシェパード（E.H. Shepard）というミルンの親友が担当した。この童話の誕生について、『くまのプーさん』原作者ミルンの「前書き」と、訳者である石井桃子の「訳者あとがき」から整理しよう。

ミルンは、自分の息子のクリストファー・ロビンが幼児期の頃、彼の子ども部屋に集まってくる「ぬいぐるみのおもちゃ」を登場させる童話として、「プーさん」シリーズを執筆した。プーという名称は、クリストファーが以前飼っていた白鳥の名前であった「プー」を用いた。しかし、ミルンの前書きによれば、「クリストファー・ロビンのテディ・ベアが、なにかすばらしい、じぶんだけの名まえを、ほしいといいだした」²²ところ、クリストファーが「プーのウィニー」と命名したという。この名称の中にある「ウィニー」という部分は、クリストファーが好きだった、動物園にいた北極熊の名前であった。プーとウィニーを合体させてできた名まえが「Winnie-the-Pooh」だった。

物語には、多彩な人物が登場する。登場人物のうち人間であるのはクリストファー・ロビンだけである。他の主要な登場人物は、牡くまの「プー」に続き、仔豚の「コブタ」、カンガルーの「カンガ」とその子ども「ルー」、ロバの「イーヨー」、虎の「トラー（ティガー）」などである。これらは全て、クリストファーの部屋にいたぬいぐるみである。物語には、他に「ウサギ」と「フクロ」がしばしば登場するが、これらはぬいぐるみではない生き物として登場する。しかし、両者には固有名詞は与えられず、「ウサギ」「フクロ」と、動物の名称そのまま呼ばれている。

話は、ミルンが、プーとクリストファーに素語りで話す物語として展開する。『くまのプーさん』冒頭では、話を聞きたがっているのはクリストファーではなくプーであるということが示され、プーは自分が主役の話が好きであるというクリストファーの主張のために、主役はプーとなった。クリストファーは、幾つかのぬいぐるみを持っていて、それらが「コブタ」や「イーヨー」や「トラー」なのであるが、巻頭の挿画²³に描かれる、プーの左腕を持って引きずりながら階段を降りてくるクリストファーの姿から見て、テディベアのプーがクリストファーにとって最もお気に入りのぬいぐ

るみであったと判断できよう。巻末には、クリストファーがプーの左脚を持って階段を上がっていく様子が描かれ、階段を上がったところには、イーヨーとカンガとコブタが置かれている。この巻頭・巻末の挿画と、クリストファーの入浴の場面を描いた挿画²⁴⁾に描かれるプーだけは、いずれもテディベアのプーであり、人格化されて登場する多くのプーとは異なる、現実世界の画として描かれている。しかし、他の挿画に描かれるプーや、その他の登場人物は、全て人格化されており、普通の人間と全く同様の生活をし動きを取る。イーヨーはロバと同様、常に四肢を地に着けて歩くが、プーとカンガとコブタとトラーは二足歩行をする。これらのうち、それらの原型の動物である熊（プー）とカンガルー（カンガとルー）は二足立位を取るが、豚（コブタ）と虎（トラー）は立たない動物であるから、コブタとトラーの動きや形態は完全な人格化がおこわれている。ストーリーに合わせたことであろう。「フクロ」「ウサギ」として登場する梟と兎は、いずれも立位を取る動物であるから、挿画となった時も、その姿は自然なものとして我々の眼に映る。これらを見てわかるように、「プーさん」シリーズの登場人物の殆どは、二足立位あるいは歩行をおこなう動物がモチーフとして使用されていて、前にも述べたが彼らは皆、人間と同様な生活を営むものとして描かれている。

プーの性格は、非常におっとりしている。「ひじょうに頭のわるいクマ」²⁵⁾と描写されているが、プーはプーなりに深い思索をしながら生活している。クリストファーは、蜂蜜をいかにしてうまく入手するかについて考えるプーに、「ばっかなクマのやつ!」²⁶⁾と微笑ましく言葉をかける。プーは彼なりの思考回路で、よく物事を考えている。とは言えプーは子熊ではない。

ところで、『くまのプーさん』に登場するプーのモデルとなったテディベアについては、ほぼこれであろうという研究結果がある。そのベアは、1921年にミルン夫人がクリストファーのためにハロッズで購入した、1914年製の、ファーネル社による「アルファ・ベア」シリーズの一つである（特徴については研究ノート(1)において前述した）。テディベアの特徴を全て満たした典型的なベアで、シェパードによる挿画に描かれるプーよりも一回り細身で頭が小さい。しかし、四肢の長さは挿画でも長く、それが書中に何回も描かれるプーの動きを無理なく表現できる要因となっている。後にディズニーアニメーションで作られるプーの体形は、ファーネル社のテディベアではなく、シェパードの挿画に描かれた丸みを帯びたプーに近い。

この童話における「くま」のプーは、テディベアであることを冒頭にて明確に述べながらも、その本文中においては全ての動物たちと共に人格化され、クリストファーの愛すべき友人として描かれている。人格化された「くま」が、そこにある。物語の登場人物の中で、テディベアから生まれたプーさんだけが、クリストファーにとって代替不可能な親友として捉えられ、他のぬいぐるみの中でも別格の存在であった。

なお、一般に見かけるディズニーキャラクターとしてのプーは、原作をもとに新たに創造されたもので、そのぬいぐるみや、アニメーションに登場するプーの姿かたちや色などは、原作の挿画のそれらとは異なる造形がなされている、今回の研究ノートでは、之に関する考察は割愛する。

2) その他の諸国における児童文学・絵本

①『おやすみなさいフランシス』（「フランシス」シリーズ）（アメリカ）

アメリカの作家ラッセル・ホーバン作、ガース・ウィリアムズによる柔らかな鉛筆画による挿画の絵本である。『おやすみなさいフランシス』（1960）を第一号とし、フランシスを主役としたシリーズが全5冊で連続出版された。フランシスは、「くま」と言っても穴熊という種類の熊をモデルとして創作されたものである。フランシスは両親と一緒に住んでいて、『おやすみなさいフランシス』では一人娘であるが、後に妹グローリアが生まれる。「くま」を主人公にした文学や絵本には珍しく、フランシスも妹のグローリアも牝である。ストーリーは、家族、姉妹、友達といった極く身近な者たちとの交流を通して、どの幼児でも理解できる思い（嬉しさ、寂しさなど）を描いたもので、特に変わった出来事が描かれているわけではない。様々な日常の場面が取り上げられ、ありきたりの出来事でありながらも子どもにとっては乗り越えなければならない小さな試練が描かれると共に、そこでどのように行動したり考えたりするのが望ましいかを、さりげなく子どもに伝える工夫がなされている。フランシスのことばには、子どもの自然な気持ちが表され、それに応じる両親の態度も魅力的である。ここに登場するのは全て穴熊で、人間や、他の動物は一切登場しない。穴熊たちは完全に二足歩行で立位をとり、時に服を着用し、フランシスは学校に通い、「おかあさん」は編み物をし、「おとうさん」はパイプをくわえ新聞を読む。フランシスの家庭の様子を示す背景には、アメリカ的な食事や家財道具や人形（ラギディ・アン）などが描かれ、アメリカの子どもにとっては非常に親しみの持てる挿画となっている。

この絵本は、人間の替わりに穴熊を用いたというだけであって、話の展開は完全な人間の生活に沿っておこなわれる。ストーリー展開上、登場人物が熊である必然性は全くない。

にもかかわらず、なぜ穴熊を人格化して物語が作られたのか、これはその挿画の中にヒントがあるように思われる。ガース・ウィリアムズ（後にリリアン・ホーバン）による挿画は淡い彩色がなされているものの、鉛筆画の柔らかいタッチで描かれた穴熊は、非常に魅力的である。子熊のフランシスとグローリアおよび友人たちは、むくむくと丸く短足で何とも愛らしく、「エンコ」座りする姿は全く人間の乳幼児そのものである。二人の親熊は大柄でどっしりと描写され、長い腕でフランシスを抱く姿は人間の親が子どもを保護するさまを象徴する。この絵本が多くの人々を魅了してロングセラーを続けているのも、暖かな文体と共に、その挿画として描かれる穴熊の魅力にある。

②『テディベアと動物たち』（ドイツ）

1993年に原作が発行され、1994年に和訳出版された、ミヒャエル・エンデ作・オーバーディーケ絵による絵本である。絵本と言っても文章は長く内容も哲学的で、幼児後期から成人まで楽しむことの出来るタイプの絵本である。古典的作品ではないが、内容が非常に興味深いので、ここに特記することにした。

主役は、アエルという名前の、古くなったテディベアである。持ち主が成長し、持ち主と遊ぶことの少なくなったテディベアが、自分の存在の意味について考えるという話である。主役のアエルは最初から最後まで「くま」のぬいぐるみのままであり、人の見ていない時にだけ歩いたり動いたりする。話の中でアエルは、生きることの意味について、いろいろな動物や昆虫や鳥に尋ねて歩く。誰もが、繰り返しておこなう日常的な出来事が生きる意味だと言うが、どれもアエルにはできないことばかりである。最後にアエルは、自分を愛してくれる新しい持ち主と出会い、二人は大切な友達となって、アエルは幸せになる。

まず、この話は、テディベアが人間にとって、どのような意味で重要なものであるかを明らかにしている。すなわち、それがないと身体的な意味での命に関わるというのではなく、その点から言えば、この本の中で出会う動物たちが大切にしている「生きる意味」とテディベアのそれは全く異なるものであることを示す。しかしテディベアは、人間にとって非常に大切な精神的安定感や幸福感、愛情などを代弁するための具体的な「モノ」として存在している。このことを明確に示すのが、この絵本である。

第二に本書は、このテディベアの存在の重要性を通して、人間にとって本当に大切なものは心の栄養、すなわち愛であることを示している。我々人間が、日常の小さな出来事に目を奪われ、大切な心を失うことの危機を伝えてくれるのが、この絵本である。

主役アエルは、熊を人格化したテディベアを更に人格化した人物で、それが人間の見ていない時に歩き動き、そして人間と同様の心を持っていて、あれこれ考えている。持ち主にとっては単なるパンヤの塊ではなく一個の人格として認識され、持ち主の心の一角に住み着くテディベアが、持ち主の愛情に応える心を持つようになると言われるテディベアの特質を掴み、哲学するかのように見える熊の生態からも案を得て創作された絵本であろう。

テディベアが、持ち主の留守中や睡眠中に歩いたり動いたりするという発想は、テディベアを愛する人々にとっては自然なものである。2006年にヒット作となったNHKみんなのうた「ぼくはくま」も、この発想から創作された楽曲であった。動物としての熊の哲学的な行動が、テディベアとなった熊にも深い情愛や思索する心があると思わせる要因となっているのではないだろうか。

③『3びきのくま』（イギリス発祥の口承昔話）

1961年にロシアで出版された、トルストイ文・バスネツォフ絵の絵本が最も知られる『3びきのくま』は、そもそもイギリスの口承昔話が元である。伝承話が初めて絵本になったのは1837年で、イギリスの詩人によっておこなわれた。この最初の絵本では、登場人物の中の唯一の人間である「女の子」は少女ではなく老婆であった。日本における初版は1962年であるが、その後いくつもの版が出され、挿絵も結末も個々に異なっている。

ストーリーの基本は簡単なものである。一人の少女が森に遊びに行き、帰り道に迷い、一軒の家

人格化される熊(2)

を見つけ、その中に入っていく。この家は「くま」の家族の家で、父ぐま、母ぐま、子ぐまの3人が住んでいるが、たまたま留守であった。少女は、この留守宅の中で、くまの食事であるスープを食べ、くまのベッドで寝てしまったところに家族が帰ってきて、家から追い出されるという、それだけの話である。

ストーリーそのものは非常に単純であり、わかりやすい話であるが、トルストイによって著わされた絵本は子どもの心を捉えて離さない魅力に溢れている。その魅力を分析すると非常に奥深く、一言で整理することは到底、不可能であるから、ここでは本稿の主題である「熊の人格化」に焦点を絞って述べる。

くまは父・母・子の3人で家族を形成して住んでおり、そこからして熊の生態を模したものは全くない。牡熊は牝熊や子熊とは同居しないことは既に第1章で見たところである。よって、この話の根底は、熊の人格化から始まる。次に、くまは3人とも衣服を着用して二足歩行している。父ぐまは大きくどっしりと描かれ、母ぐまは幾分華奢に、そして子ぐまは極端に小さい。衣服を着用しているものの、「くま」本体は熊らしく描かれている。第三に、トルストイ著の絵本における「くま」は皆、名前を持っていて、3人のうち父ぐまは「ミハイル・イワノビッチ」と言う。ここで使用される「ミハイル」という名前は既述の如く、ロシアにおいて熊を愛称化する際に一般的に使用される名前である。ちなみに、1980年モスクワ・オリンピックのマスコットであった、牡の子ヒグマのキャラクター「こぐまのミーシャ」の「ミーシャ」は、ミハイルを更に愛称化する際に語尾が変化したものである。ここで再確認できることは、ロシア文化における熊には「ミハイル」という男性の固有名詞が愛称として長く用いられているということである。『3びきのくま』における子ぐまには「ミシュートカ」という名前が付けられているが、この子ぐまは文中で「ぼく」と言っており、牡の子であることがわかる。ミシュートカとは、ミーシャの語尾が更にもう一段階変化したものである。

すなわち、この絵本からは、ロシアにおける熊の存在の一端を知ることができる。ロシアにおける熊は、男性名である「ミハイル」がその代名詞的愛称となっているように、基本的に男性性を有する動物として解釈されているということである。この絵本には3人のくまが登場するが、それらの中で、父ぐまが、最もロシア的な熊を表現しているものと見てよいであろう。父ぐまは挿画に描かれるように大柄で太く、頭も大きく、声も大きく「こわい こえで ほえ」(文中より。絵本にページ記載なし)るものであり、絵本の中で唯一の人間として描かれる「おんなのこ」に对照して非常に大きく恐ろしい存在である。「おんなのこ」にとって大きく恐ろしい動物として描かれるくまが、ロシアの人々にとっての熊の存在を、いくぶんか象徴的に表しているのではないかとと思われる。この口承文学における熊の描写は、熊が単なる動物ではなく人間と同様に生活をし物事を考える存在であると考えられていたことと、熊が男性性を有する恐ろしい存在として認識されていたことを明らかに示すものである。

この『3びきのくま』は、2007年5月より2008年5月(予定)まで、三鷹の森ジブリ美術館で企

画展示として取り上げられ、多くの客足を呼んでいる。

2. 日本の児童書に描かれる「くま」

①『くまのこウーフ』（「ウーフ」シリーズ）

児童文学であると共に絵本にもなっている名作である。作者は、神沢利子、挿画は井上洋介による。1966年に第一作「さかなにはなぜしたがない」を『主婦之友』に発表したのが最初で、その後に全26話が順に発表された。それらは児童文学として童話集にまとめられ、うち10話は一話ずつの絵本になり、近年には全話が全3巻の文庫版となって発売されている（2001）。第一話の発表から既に40年を経た現在でも、ウーフ人気は衰えることがない。

神沢は「ウーフ」シリーズを発表する前にも、『ちびっこカムのぼうけん』『ヌーチェのぼうけん』などを発表しているが、それらも、この「ウーフ」シリーズも、神沢が幼少期を過ごした樺太（現ロシア領サハリン）の影響を強く受けているという（『くまのこウーフ』付録の解説（岩崎京子）より）。「ウーフ」が「くま」の子どもとして描かれることになったのも、樺太に居た頃に熊が神沢にとって身近な存在であったことが要因であろう。

ウーフは「くま」の子どもで、両親と共に暮らしている一人息子である。話の中には人間は全く登場せず、全て動植物と昆虫を人格化し、登場人物として設定してある。森に、多くの友達とその家族がいるが、ウーフ一家以外に熊は登場しない。ウーフの友人である兎の女の子にはミミちゃん、狐の男の子にはツネタという名前があるが、多くの登場人物は名前を持たない。

この文学（絵本）の魅力は多々あるが、その一部を挙げるとすれば、身近な出来事に大きな発見をし続ける主役ウーフの瑞々しい感性と、それを優しく受け止める親くまとの関係、ウーフの仲間との日常性に満ちた関わりなどのストーリー上の魅力と、動物の特性を生かしながらも完全に人格化して描かれた個性的な挿画とにある。ウーフは、おっとりとした性格ながら、身の回りの様々な「当たり前」に思えることを心にとめ、当たり前の中に潜む当たり前でない素晴らしさに気づく。きつねのツネタに「ばっかだなあ、ウーフ」²⁷⁾と言われることもしばしばあるが、ウーフの独特の視点とはどまることなく次々と現れ、読み手を魅了する。「ちょうちょだけに なぜなくの」などは、あらゆる生命が他の生命の犠牲のうえに生を与えられていることを示すもので、ツネタの鋭い視点は世の現実を語る一方、ウーフが素直な感性をありのままに示し、ツネタの言葉への返答に困る様子が描かれる。小さな出来事の中に潜む真理を見せるウーフである。

登場人物となる動物や昆虫は、それらの持つ生態学的な特徴をとらえて描写されている箇所と、全くそうでない箇所とがある。ウーフに限定してみると、「毛むくじゃらな手と足」「そいつ（筆者注：手のこと）はろくなことはしない。たたいたり、すくったり、口へもっていったりな。」（「さかなには なぜしたがない」における、ウーフに対する「さかな」の言葉）「ぼくはしたがあるから、はちみつがなめられる。手があるから、おかあさんにだっこもできるよ。」（「さかなには なぜし

人格化される熊(2)

たがない」における、ウーフの言葉)などの表現には、熊としての身体構造が密かに書き込まれていると見られる。その一方で、「『あんまりつかってたら、さむくなっちゃった。』」(「ウーフはなんにもなれないか?」における、川に長く浸かっていたウーフの言葉)「『あいつ、へんなやつだなあ。はだかんぼで、およぎもしないで、川にじっとつかってたぜ。へ、川とおふろをまちがえてるんだ』」(「ウーフはなんにもなれないか?」における、ウーフの友達の狐ツネタの言葉)「『さあ、ごはんにしましょう。おとうさんといっしょにね。』」(「ウーフはなんにもなれないか?」における、おかあさんの言葉。筆者中：熊は、牡と牝は生殖期間以外は同居せず、子育ては専ら牝熊の役割である。研究ノート(1)第1章を参照のこと)など、熊の生態を一切考慮せず、完全に人格化し人間として捉え、人間の社会生活を「くま」を用いて描写した箇所もある。

この物語におけるウーフは、基本的には完全に人格化されて描かれているのだが、同時に動物の生態をさりげなく捉えた表現が盛り込まれている。

②『こぐまちゃん おはよう』(「こぐまちゃんえほん」シリーズ)

若山憲の絵により、複数の作家による原案発案の合作から成る絵本シリーズである。『こぐまちゃん おはよう』は、それらの中の第一作で、1970年に初版が発行された。以来、全15冊の「こぐまちゃんえほん」シリーズと、より低年齢である乳児を対象とした「はじめてのこぐまちゃん」シリーズ(全3巻)から成る大作であり、いずれも人気を呼んでロングセラーを記録している。

子どもに人気がある理由について、同書付録のパンフレットによれば、シンプルな線と美しい色を用いた挿画であること、身近なテーマが子どもの視点で展開していること、会話や擬音、擬態語が多く用いられていること、絵が語りかけてくるようにわかりやすいことが挙げられているが、主役に「くま」が選ばれた理由については特に記載がない。

このシリーズの特徴を、本稿における考察の目的に合わせて述べてみよう。この絵本の主役である「こぐまちゃん」は、このシリーズにおいて、熊としての言動は全く取らない。こぐまちゃんは完全に人格化され、人間の生活そのものの暮らし、人間の子どもの遊びそのものの遊びを展開する。すなわち、この絵本は、主役に人間ではなく人格化された熊を用いたというだけであって、熊の生態を示す、或いは子熊の動態をモチーフに創作された絵本ではないのである。

では、なぜ「くま」のキャラクターを用いて描かれたのであろうか。これは、イメージとしての熊の有する丸みを帯びた体型、大きな頭、短い手足などを総合すると、魅力的な形態のキャラクターとして描きやすいという点が評価され、数ある動物の中から熊が選択されたのではないと思われる。当然ながら「こぐまちゃん」は常時、二足直立歩行しているのも、人格化された熊としてのみ用いられるキャラクターだからなのである。

こぐまちゃんの服は常に寸胴の、一般に「アップパ」と呼ばれるようなものであり、また顔の構造は殆ど同じで、丸点の目に「へ」の字型の口の位置を若干ずらすことにより、目線や表情を辛

うじて示している。その無表情とも言える挿画の顔が、却って読者の想像を膨らませ、我々の感情に沿った表情を見せてくるのである。

作者は異なるが、中川李枝子作・山脇百合子絵による比較的新しい絵本『くまさん くまさん』(1995)がある。この絵本の主役も「くまさん」と表現される子ぐまであり、常に衣服を着用し二足歩行し、人間と全く同じ日常生活を送っていて、絵本の中では「くまさん」の生活の様子が淡々と描かれる。「こぐまちゃんシリーズ」の「こぐまちゃん」とは異なり、「くまさん」の形態は実際の熊に若干近似していて、皮毛感、長い鼻づらと手足が表現されているし、表情も描かれる。しかし、『くまさん くまさん』においても「こぐまちゃんシリーズ」同様、主役は人格化された熊であることには相違なく、そこに熊でなくてはならない必然性が無いことも同様である。やはり、人格化された熊のキャラクターが有するところの柔らかく可愛らしい感じが、乳幼児に対して教育的作用、とりわけ基本的生活習慣などの基礎的な行動習慣の習得を期待する本として、乳幼児が楽しみつつ親しみを持って接することのできる点を有するために有効であると考えられたのではないかと思われる。

結 まとめに変えて

今回の研究ノートでは、ここまでの2回にわたって、キャラクターとしての「くま」の魅力の要因を、様々な方向から分析した。多くの分野の先行研究成果を用いて探ってきたのであるが、その魅力の解明は予想以上に難しく、この課題追究の道筋は複雑であることを感じた。今回のノート作成は非常に大まかなものであって、それぞれの章で試みた追究を更に十分に熟成させることが必要である。いずれの章で用いた先行研究も夫々の分野で深い考究がなされているものであり、それらを接続させ構造化して、文化としての「くま」のキャラクターの魅力を描き出す作業は容易なことではないだろう。

それでも、この不思議な魅力を持つ、キャラクター化された「くま」の魅力の考察は、興味深く、乳幼児教育や児童文化の一角に位置する「モノ」の考察として重要であろうか。今後も可能な範囲で、この研究を深展させて行きたいと思う。

なお、この研究ノートにおいては、保育現場や家庭における「くま」のキャラクターの存在の確認や、子どもが「くま」のキャラクターとどのような関係を結んでいるかなどの実際の姿まで触れることができなかった。続く研究ノートシリーズ(3)では、実証的考察を手掛け、それをもって最終的に、3連続からなる研究ノートの、ひとまずの収束を目指したいと考えている。また、この研究ノートにおいては、課題の特質上、本来ならば絵、挿画などを掲載したほうが分かりやすいのであるが、著作権その他の権利問題が生じる可能性のあるものが多く、今回は全ての掲載を控えることとした。ご関心のある向きには、お手数をかけるが、筆者までお尋ねいただくか、参考文献などを直

人格化される熊(2)

接御覧いただきたい。

最後になるが、この研究ノートの課題に取り組むために、本学の児童学科に所属される、児童文化論の森下みさ子先生、保育学の長山篤子先生に、格別なるご助言とご指南を頂戴した。ここに記して感謝する。

引用文献一覧

- (1) ガツァーク編, 渡辺節子訳『ロシアの民話Ⅱ』恒文社 1979 p. 330
- (2) 同上 p. 330
- (3) 同上 p. 332
- (4) プロップ著 齊藤君子訳『ロシア民話』せりか書房 1986 p. 316
- (5) 同上 p. 316
- (6) 同上 p. 317
- (7) 萱野茂『アイヌの昔話 ひとつぶのサッチポロ』平凡社ライブラリー20 平凡社 1993 p. 29
- (8) 松居友『イヨマンテ, 熊送りの思い出』松居友・小田イト『火の神の懐にて ある古老が語ったアイヌのコスモロジー』宝島社 1993 p. 248
- (9) 中路正恒「イヨマンテという送りの思想」赤坂憲雄他編著『神々のいる風景』いくつもの日本Ⅶ 岩波書店 2003 p. 77
- (10) 同上 pp. 78~79
- (11) 同上 p. 79
- (12) 同上 p. 80
- (13) 同上 p. 81
- (14) 中村禎里『日本動物民俗誌』海鳴社 1987 p. 78
- (15) 同上 p. 80
- (16) 同上 p. 80
- (17) 同上 p. 80
- (18) 同上 p. 81
- (19) 同上 p. 81
- (20) 同上 p. 80
- (21) ボンド著 フォートナム画 松岡享子訳『くまのパディントン パディントンの本1』福音館文庫 S-2 福音館書店 2002 p. 11
- (22) ミルン・A.A. 著 シェパード絵 石井桃子訳『クマのプーさん』岩波少年文庫008 岩波書店 1956 p. 3
- (23) 同上 表紙および p. 14
- (24) 同上 p. 38
- (25) ミルン・A.A. 著 シェパード絵 石井桃子訳『プー横丁にたった家』岩波少年文庫009 岩波書店 1958 p. 264
- (26) 前掲(22) p. 42
- (27) 神沢利子作 井上洋介絵『くまの子ウーフの童話集 こんにちはウーフ』ポプラポケット文庫001-2 ポプラ社 2005 p. 13

参考文献一覧

<研究書>

- 赤坂憲雄他編著『神々のいる風景』いくつもの日本Ⅶ 岩波書店 2003
秋野茂樹他編著(財)アイヌ民族博物館監修『アイヌ文化の基礎知識』草風館 1993

- Gazak, 100 MARCHEN DER VOLKER DER SOWJETUNION, Claassen Verlag GmbH 1977
 (ガツァーク編 渡辺節子訳『ロシアの民話Ⅰ』恒文社 1978)
- Gazak, 100 MARCHEN DER VOLKER DER SOWJETUNION, Claassen Verlag GmbH 1977
 (ガツァーク編 渡辺節子訳『ロシアの民話Ⅱ』恒文社 1979)
- 萱野茂編著『アイヌの昔話 ひとつぶのサッチポロ』平凡社ライブラリー20 平凡社 1993
- Gimbutas, Mariya, *The Goddesses and Gods of Old Europe: 6500-3500 B.C., Myths and Cult Images*
 (ギンブタス, マリヤ『新装版 古ヨーロッパの神々』(有)言叢社 1998)
- Sibley, B., (illustrated by E.H. Shepard) *THE POOH SKETCHBOOK* 1982
 (ブライアン・シブリー編 今江祥智・沿道育枝訳『クマのプーさんスケッチブック』BL出版 1995)
- Sibley, b., *THREE CHEERS FOR POOH* 2001
 (ブライアン・シブリー著 早川敦子訳『クマのプーさんの世界』岩波書店 2003)
- 中村禎里『日本動物民俗誌』海鳴社 1987
- Пр о п п , В ., Я ., *РУССКАЯ СКАЗКА*, 1984
 (プロップ著 齊藤君子訳『ロシア民話』せりか書房 1986)
- 本田和子・皆川美恵子・森下みさ子『わたしたちの「江戸」—くま・子ども—の誕生—』新曜社 1985
- 松居友／小田イト『火の神の懐にて ある古老が語ったアイヌのコスモロジー』宝島社 1993
- ミルワード (Milward, P.) 著 小泉博一訳『童話の国イギリス』中公新書1610 中央公論新社 2001 (原書の記載なし)
- 山田孝子『アイヌの世界観』集英社 1994
- 山本多助『カムイ・ユーカラ アイヌ・ラッ・クル伝』平凡社ライブラリー26 平凡社 1993

<文学, 絵本, 写真集>

- あいはらひろゆき文 あだちなみ絵『くまのがっこう』キャラ研 2002
- あいはらひろゆき文 あだちなみ絵『くまのこミンのふゆじたく』ソニー・マガジズ 2004
- いりやまさとし作・絵『みどりのくまとあかいくま しろくまくんとしあわせいろ』ジャイブ 2006
- ДЕТГИЗ, ЕВГЕНИЙ МИХАИЛОВИЧ РАЧЁВ 1950
 (ウクライナ民話 ラチョフ絵『てぶくろ』福音館書店 1965)
- Wolde, G., *EMMAS VERKSTAD*, Bokforlaget Natur och Kultur 1977
 (ヴォルデ文・絵 つばきはらなご訳『エマのしごと』童話館出版 2006)
- Ende, Michael and Oberdieck, Bernhard, *DER TEDDY UND DIE TIERE*, K.Thienemanns Verlag, Stuttgart-Wien 1993
 (エンデ著 オーバーディーク絵 ささきたづこ訳『テディベアとどうぶつたち』岩波書店 1994)
- 神沢利子作 井上洋介絵『くまの子ウーフの絵本2 さかなにはなぜしたがない』ポプラ社 1979
- 神沢利子作 井上洋介絵『くまの子ウーフの童話集 くまの子ウーフ』ポプラポケット文庫001-1
 ポプラ社 2005
- 神沢利子作 井上洋介絵『くまの子ウーフの童話集 こんにちはウーフ』ポプラポケット文庫001-2
 ポプラ社 2005
- 神沢利子作 井上洋介絵『くまの子ウーフの童話集 ウーフとツネタとミミちゃんと』
 ポプラポケット文庫001-3 ポプラ社 2005
- 菅野由貴子作・絵『しろくまくんの このあな なあに?』大日本図書 2007
- 蔵富千鶴子文 柿本幸造絵 武市八十雄案『どんくまさん』至光社 1967
- 合田経郎『ほくはくま』小学館 2007
 (NHKみんなのうた「ほくはくま」宇多田ヒカル作詞・作曲の映像をもとに構成)
- こんのひとみ作 いもとようこ絵『くまのしんぶんしゃ』金の星社 2006
- 酒井駒子作・絵『よるくま』偕成社 1999
- Seton, E.T., *Monarch*, The Bear of Tallac

人格化される熊(2)

- (シートン作・絵 今泉吉晴訳『グリズリー・ジャック』シートン動物記9 2006)
Tolstoy, L., Basnetsov, *Y.THE THREE BEARS*
(トルストイ文 バスネツォフ絵 おがわさらとよき訳『3びきのくま』福音館書店 1962)
中川李枝子作 大村百合子絵『いやいやえん』福音館書店 1962
中川李枝子作 山脇百合子絵『くまさん くまさん』福音館書店 1995
Hacke, A., Sowa, M., *EIN BAR NAMENS SONNTAGVERLAG*, Antje Kunstmann GmbH 2001
(ハッケ作 ゴーヴァ絵 丘沢静也訳『クマの名前は日曜日』岩波書店 2002)
Foreman, M., *Hello World*, Walker books Ltd. 2003
(フォアマン・マイケル著 長田弘訳『世界をみにいこう』フレーベル館 2003)
原京子作 はたこうしろう画『はるにあえたよ』絵本のおもちゃばこ24 ポプラ社 2007
Bruna, D., *boris, Barbara en basje*, Mercis Publishing 1994
(ブルーナ作・絵 角野栄子訳『ボリスとバーバラのあかちゃん』ブルーナのおはなし文庫⑩講談社 1994)
Hoban, R., Williams, G., *BEDTIME FOR FRANCES*, Harper & Row, Publishers, Inc.,1960
(ホーバン文 ウィリアムズ絵 まつおかきょうこ訳『おやすみなさい フランシス』福音館書店 1966)
Hoban, R., Hoban, L., *A BABY SISTER FOR FRANCES*, Harper & Row, Publishers, Inc.,1964
(R. ホーバン作 L. ホーバン・絵 まつおかきょうこ訳『フランシスのいえで』好学社 1972)
Bond, M., Fortnum, P., *A Bear Called Paddington*, WM. Collins Sons & Co. Ltd. 1958
(ボンド著 フォートナム画 松岡享子訳『くまのパディントン パディントンの本1』福音館文庫S-2 福音館書店 2002)
Bond, M., Fortnum, P., *PADDINGTON GOES TO TOWN*, William Collins. Ltd. 1968
(ボンド著 フォートナム画 田中琢治・松岡享子訳『パディントン街へ行く パディントンの本8』福音館文庫S-48 福音館書店 2006)
Milne, A. A., Shepard, E. H., *THE POOH STORY*, Methuen & Co. Ltd.1967
(ミルン・A.A. 著 シェパード絵『絵本 クマのプーさん』岩波書店 1968)
Milne, A. A., Shepard, E. H., *WINNIE-THE-POOH*, Egmont Children's Books 1926
(ミルン・A.A. 著 シェパード絵 石井桃子訳『クマのプーさん』岩波少年文庫008 岩波書店 1956)
Milne, A. A., Shepard, E. H., *THE HOUSE AT POOH CORNER*, Methuen Children's Books 1928
(ミルン・A.A. 著 シェパード絵 石井桃子訳『プー横丁にたった家』岩波少年文009 岩波書店 1958)
若山憲絵 森比佐志他著『こぐまちゃんおはよう』こぐま社 1970
渡辺茂男文 大友康夫絵『いってきまあす!』年少版こどものとも発行 福音館書店 1983

<HP, DVDなど>

「あめふり くまのこ」鶴見正夫・作詞, 湯山 昭・作曲

アイヌ白老美術館 公式HP

NHKオンラインHP

供犠論研究会(中村生雄ら代表) 公式HP

「ぼくはくま」宇多田ヒカル CD及びDVD 東芝EMI

ポプラ社 公式HP

三鷹の森ジブリ美術館企画展示「3びきのくま」案内パンフレット (財)徳間記念アニメーション文化財団発行

山形大学人文学部人間文化学科 欧米文化論 相沢直樹研究室 公式HP